

遠ざかった明日

芹沢光治良



新潮社版

とお
遠ざかった明日 あす



昭和47年 1 月 10 日 発行

昭和49年 4 月 10 日 5 刷

定価 800 円

著 者 せりぎわこうじろう 芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 株式 新潮社 会社

郵便番号 162

東京都新宿区 矢来町 71

振替 東京 808

電話東京(260)1111(代)

印刷・二光印刷株式会社 製本・大口製本
乱丁本はお取替えいたします。

© by Kojiro Serizawa. Printed in Japan

遠ざか
つた
明日

装幀画・朝倉響子

第一章

昭和二十六年（一九五一年）の六月×日、森次郎はフィリッピン・エアラインの四発のプロペラ機にのって、アラビアの砂漠の上空をローマに向って翔^{トビ}んでいた。

乗客は五十人足らずで満員であったが、日本人は、右横の席の石山と、すぐ前の席にかけた緒方夫妻の他に、ロンドンまで乗りあわせた川本と五人ぎりである。日本がアメリカの占領下にあつて、日本人が国外に出ることは禁じられていたが、次郎たちは、ローザンヌで開かれる国際ベソ大会に招待されて出席するので、例外的に許可がおりたのだった。その許可をしたGHQの、頭の禿げあがつた大佐殿も、

「君たちは国民全部が連合軍の捕虜だということを忘れてはいかんぞ。それから、文学者の国際会議で政治的発言をしたらば、日本へ帰る時に、入国禁止になるということも、心におきたまえ」と、威^{イデ}した。この言葉はその日、三月なかばなのに東京に三十センチも降った雪とともに、次郎の胸にいつまでも消えなかった。それに加えて、その数日後、パスポートを勿体らしく手渡し、た外務省の旅券課長も、

「ご承知でしょうが、国外では言動を慎んで下さいよ、特に政治的発言や進駐軍の批判などは絶対にしないように……さもないと、帰国できないというような不幸な事態が起きないともかぎり

ませんからね」と注意した――

「森君、これで、ようやく日本を脱出した感を深くするね」

右頬に息を吹きかけるほど顔をよせて、石山が言った。

カラチの飛行場を発つてから、どれほどの時間がたったか、高度一万五千メートルを飛行しているというが、窓の外はただ大きく紺青に光った宇宙がひろがるばかりで、下をのぞくようにすれば、広漠と黄金色に輝く砂漠の大地に、微細な黒蟻のような機影が唯一の動く生物に見えて……次郎はふと、西方浄土を信じた祖先のことを思った。昔の人々は仏陀の生れた土地・印度をあこがれて、西方浄土と考えたのだろうか、このように生物の棲ま^すない輝く巨大な無のなかに、われわれの魂が肉体の死後、翔^かけ入るものと想像したのだろうか。漠然とそんな思いにふけっている時、言葉をかけられて、石山に目を向けた。

「ようやく日本を脱出した……？」

「この次はローマだものね。今まではどの空港でも、日本がついて廻っているようでやり切れなかったが、ローマへ着けば、ヨーロッパだ、吻^{はづ}とするだろう」

「そうね、長い間、おたがい日本人だということで苦労しましたから……」

次郎も吐息のようにした。石山は有名な出版社の編集長であるが、戦争中雑誌の編集についてさんざん苦労した末、年齢も次郎とさしてちがわないのに、戦争末期には海軍に召集されて、北海道へ送られて、基地の造営のために土工のように酷使されたそうだが、今もアメリカの占領下で検閲に苦しみながら、日本人である悲哀を味わっているのであらう。次郎自身も長い戦争の間というまでもなく、今日なお同じ苦悩から、幾度国家とはなにか、考えたか知れない――個人にとって国家はどんな意味があるだろうか、偶然に生れたところが日本であったから、私は日本人

になったのにすぎないが、私の運命を日本という国家が支配して、そこから脱け出すことができない。国家があるから、個人は災難のような不幸を甘受しなければならない。国家さえなかったら、こんなに戦争の苦悩をなめないですんだらうに……と。それ故、石山に同感して吐息したのだが、しかし、石山はちがったことを言いたいようだった。

「どこの空港でも不愉快でしたね。ポータから小役人まで威張りくさって……俺たちは独立したんだぞと、胸を張るのはいいが、お前たちは敗戦者ではないかというように、侮蔑した態度をするんだからね……飛行機に給油するのに、どの空港でも一日か二日かかるのは、意味ないね。その都度、ホテルで泊めてくれるのはいいが、どのホテルでも、日本人ばかり軽んじて、不愉快だった……」

「僕たちは捕虜ですから……」

「同じ東洋人なのに……ヨーロッパでは、こんな目にはあわないだろうが……森さん、かつて洋行した時には船でしたでしょうが、寄港する港で、日本人はあんな目で見られて、あんな扱いを受けましたか」

「いいえ、どの港にも日本船がたくさんおったし、日本人が住んでいて、日本の港かと疑うほどでしたから……」

「そうですね、今日では飛行場が港でしょうが……悲しいですね。どの空港にも各国の飛行機が、さかんに発着していたのに、わが邦は一機も飛行機はなし、どの空港にも日本人はいないし、日の丸を見ませんね……これでは、日本は羽をむしり取られ、裸にされてしまつて、世界におきざりをくいますね」

そう石山は吐息したが、次郎は石山の言葉から思い出していた——羽田を翔び発つて最初に寄

ったのが沖繩飛行場であつたが、真夜中の飛行場にはなま暖かな風が小雨を吹きつけていた。給油する間休むようにとスチュアデスにつれられて休憩所へ行つた、暗い部屋に日本の青年が三、四人働いていて、コカ・コーラと菓子運んでくれた、その一人に、次郎は便所はどこかと、日本語でたずねたが、アウトサイドと、ただ一言英語で答えて、いやらしく輕蔑した目を向けた。

この給仕の方がカルカッタやカラチの空港であつた人々よりも、いやらしくはなかつたろうか。その翌朝、気がつくと、紺青に澄みきつた海と空のなかに、みどりの島々が浮び、白雲が流れていて、夢見心地で美しさに見惚れていて、それがフィリッピン群島だと知らされた時の心の動揺は……わずか数年前のことだが、この海に沈んだり、この大空に散華したりして、多くの若者が帰還しなかつた。その人々が呼びかけるようだが、答えられなくて胸苦しくなつた。間もなく幾隻も褐色の船体やマストを緑の波間にさらして沈没した日本船が見え出してから、やがてマニラ空港だと言われて、網棚にのせておいた小さな花束に氣をとられた。羽田空港でゲートにはいる直前に、混雑した人波をわけるようにして、田野夫人が駆けよつて、

「ああよかった、間にあつて……先生、飛行機がマニラに寄るそうですね。私たちは行きたくても行けません。あの子の亡くなつたマニラのどこかへ、この花を落して下さい」

と、声をはずませて、数本の薔薇の花束を胸におしつけるようにした。夫人の独り息子の和男はK大学の二年生で、学生兵として出陣して、フィリッピンから便りがあつたまま帰還しなかつた。夫人は帰還した学友や戦友を訪ねまわつて、アメリカ軍が比島に上陸する直前まで、和男がマニラでマニラの陸軍病院におつたことを知りえたが、そして、戦友たちはみな、アメリカ軍は捕虜の病人を手厚く扱うから必ず生きて帰ると保証したが、夫人はマニラの陸軍病院で自ら命をたつたものときめた。というのは、いざ前線へ発つ前日、それとなく最後の別れに帰宅したあ

と、神棚に遺書がのつていた——日本男子らしく立派に一命を国家に捧げます。断じて卑怯な真似はしません。御両親様も最後まで頑張つて下さいと、書いてあった。

和男の父は海軍に關係のある出版社の社長であるが、次郎とは同年輩で、沓掛くしかけの夏の家が近所であつたから家同士のつきあひをした。特に、ゴルフ好きで、ゴルフの下手な次郎を、沓掛ではもちろん、東京に帰つてからも、親切に誘ひ出したが、和男も大学の予科の学生の頃からゴルフをはじめて、出陣の年の夏も次郎の相手をしたほどで、次郎もすなおな青年をよく識つていた。和男の父はその遺書を発見した頃、多少自慢らしく次郎に打明け話をして、

「あいつは文学趣味がなかったから、こんな散文的な遺書を書いたのでしょうか。軍人の遺書らしく、立派な文章を書いてくれなかったのが、残念で——」

というようなことを言つた。海軍關係の仕事をする人であるから、こんな場合にも本心をかくすのだろうか。次郎は疑つた。東京に空襲があるようになってから、たがいに疎遠になつたが、敗戦後二年ばかりして、次郎は市川に住む友人を訪ねての帰途、駅前駅前の闇市をのぞいていて、偶然に田野にぱつたり会つた。麻布で戦災にあつて、そこから近い知人の離れに世話になつてゐるから、家妻にも会つてくれとて、むりやり次郎を長屋の一室のような家へつれて行つた。夫人も喜んで迎えて、仕事も財産も失ひ、おちぶれたことなど苦にもならないように、東京に較べて物資の豊富なことや庶民のなかでの暮らしの気安さなどを、のどかに話しているうちに、マニラの陸軍病院で最後に和男に会つたという戦友の話になつても、その調子や表情を変えなかつた。

「あの子があんな遺書をのこしてゐなかつたら、捕虜になつて帰還するかも知れない望みもありますけれど……あの子は捕虜になる前に自決していますわ」

「今になつてみると、おれは馬鹿正直で、軍人精神を和男に説いて、卑怯な真似はしてはならん

と、いつも言ってたからなあ」

「私はあの子が最後に家へ来た時、よほど、お父さんに内証で、あの子に話そうか迷ったわ……どんなことがあっても、生きて還るんだよって……」

「そう話してやってくれればよかったのになあ」

「あの時、そうあの子に話したら、あなたに追い出されたかも知れませんか……でも、話さなくてよかったです。話していたら、あの子はいざという時、迷ったり悩んだりしたでしょうからね」

次郎は言葉のはさみようもなく、田野夫婦の会話を呆然と聞いていた。和男が戦死したことはじめて知ったからだ、財産や仕事ばかりか、独り息子まで失った夫婦をどう慰めていいかわからなかった。

今飛行機の網棚から花束をおろしながら、次郎はふと、その時のどかに話していた夫人の目からこぼれるように落ちた涙のことや、花束をもつて駆けつけた時、田野がかつぎ屋のようなことをしていると話したことを思った。スチュアデスは怪訝な顔をして、じっと次郎の顔を見て答えなかった。自分の英語がややまっている筈がないから、次郎は重ねて言った。

「気の毒な学生兵のお母さんから、頼まれたのです。独り息子がマニラで戦死して、遺骨もわからないから、息子の霊を慰めるために、この薔薇の花をマニラの空から撒いて下さいって——」

スチュアデスは黙ったまま、花束をまた網棚にのせて去って行った。

「飛行機は船とちがって、花束を投下することはできないんだろう」

そう隣席の石山が慰めたが、次郎もはじめて飛行機に乗ったので、そうかと思ったものの、ス

チュアデスの背後に厳しい拒絶を感じて、胸のなかまで凍る思いがした。

やがてマニラ飛行場に着陸したが、マニラに一泊する予定で、手荷物をもって降りる支度をしている、日本人だけは待つてくれと言われた。他の乗客が降りてしまつてから、フィリッピン・エアラインの駐在員らしい青年が乗りこんで来て——対日感情がなお非常に險惡であるから、他の乗客といつしよにホテルに案内できない。途中で不測の事件が起きるにきまつているからとて、しばらく待つようになうのだ。小半時、小さな窓から外を見ていて明るい午後の陽に目が疲れた頃、同じ駐在員が再び来て——この飛行機には日本人の乗客はなかったものと、思いこませたから、すぐホテルへ案内するとして、早く早くと急ぎたてた。おんぼろのジープにのせられ、税関の外に運ばれて、そこに待っていた大型の自動車に乗りかえたたん、フルスピードで走り出した。緑の並木のある広い路である。駐在員は自ら運転しながら、大きな声の英語で言った。

「ここには日本人をかたきとして憎悪している人が多いですよ。何処で襲撃されるかわかりません。プラインドをおろして下さい。ホテルに行つても、口をきかずに私が案内する部屋について来て下さいよ」

自動車は急停車した。広い並木路に面した白い大ホテルの前である。駐在員のあとに従つて、ホテルにはいり、フロントにもよらずに、大ホール横の広い階段をのぼり、二階の奥の小さなサロンにはいった。駐在員は厳しい顔で注意した。

「ここなら安全です、食事は運ばせますから、ここから廊下へも絶対に出ないで下さいよ。階段をのぼる時にホールの壁面にお気付きになりませんでしたか。気付かなかつたら、それでいいです……」

そんな風に、さんざん威かすような言葉を残して、瘠せた駐在員は去った。彼の言ったホール

の壁面というのは、流石に石山はちゃんと目に入れて階段を登ったそうで、マニラ市街で日本軍に虐殺される人々を生々しく描いたものだったというが、こんな状態では、折角マニラに一泊するのにも、夕涼みにも出れない。それを石山はたいへん残念がった。サロンの内側から右と左に通じる部屋にかくれるようにして、一泊したが、次郎は夕食をすませて、自分にあてられた部屋に退ったが、手提鞆の横に、羽田から持ってきた小さな花束があった。貴重な罌粟の花は萎れて悲しげだ。九時近いのに、マニラの空は黄昏色に澄んで静かに街の上にひろがっている……あの和男君はどのあたりで自刃したろうか。田野君は家宝の名刀を軍刀にして持たせたそうだが、アメリカ軍が上陸した時に病床にあつたとすれば、自刃しなくても、激昂した市民が餌食のようにおそいかかって殺したのではなからうか。夫人はこの花を持って来た時も、いつか独り息子の最後の地を見たいと切ない気持を吐露したけれど、和男君の霊はどこにいるのだろうか……次郎は無意識に罌粟の花弁をむしりつつは、窓から落していた。

翌朝もフイリッピン人に気付かれないようにと、次郎たち日本人は他の乗客よりも三十分も早く空港につれて来られるなり、飛行機のなかに入れた。全くむりやり入れられたという仕打ちであつた。

こんな風にマニラで受けた仕打ちに較べて、カルカットやカラチの空港の税関の小役人の傲慢な態度も、ホテルのボーイの軽蔑する態度も、ただ事務的で、石山のように憤るにあたらないのだが……そう次郎は考えて、隣席の石山に話しかけた。

「日本を脱出して、どこまでも戦争がついて廻りますね。なにしろ長い戦争だったし、おまけに世界中を相手に戦ったのだから……」

「苦しい戦争だった、おたがいに疲れ果てたものね」

「時どき、人類も文化も信じられなくなって、絶望したことがありましてね……そんな時、僕は戦争がおわったら、もう一度ヨーロッパへ行こう、それまでは頑張って生きていようと、ただそれだけの希望で、戦争の苦悩をたえたものです」

「森さんらしいなあ……頑張り甲斐があつて、こうして、もうすぐヨーロッパですね。一体再びヨーロッパへ行つて、どうするつもりでした」

「旧友たちにあつて、同じジェネレーションに何故二回も戦争をするのか、きいてみるつもりでした、ぼくが留学したのは、第一次世界戦争直後で、戦勝国のフランス人はもちろん、ヨーロッパ人は、もう戦争はこりこりだ、二度としてはならないと皆言っていたからね」

「それで、今度の国際会議に日本代表を買つて出たつてわけですか」

「それに、四分の一世紀ぶりにヨーロッパへ行くのだが、最も文化の進んでいると考えられる文明国が、この二十五年間に、どれだけ文化が進み、どれだけ人間がしあわせになったか、この目でたしかめたいと、思ったからです……」

「そう、僕は大学で西洋史を専攻したけれど、西洋ははじめてだが……日本は相変らず連合軍に占領されて、いつ講和条約が結ばれるか、わからないし、目かくしされて世界が見えない……それ故、西洋の先進国が、戦後どうしているか、はつきり見たいし、情報を集める方法を考えたいが……空港を見ただけで悲観したなあ。日本はすっかり立ちおくれってしまった——」

「石山さんが愛国者のようなことを言うんですか」

「ぼくは愛国者ですよ、ほんとうの意味の」

「ぼくは国家とは何か、個人にとって国家はどんな意味があるか、考えなければならぬと、あちこちの空港を見て、つくづく思いましたかね、これは戦争中にいつも考えたことだけれど」

「いくら考えても、その問題は どうにも ならん ですよ……日本なんて糞喰えと思つても、日本に生れたんだからね……」

「僕の旧友で、自分の意思で国家を選んで、フランスに帰化した奴が ありますよ。この男に会つて、そんな問題について語りたいと思つて いるけれど」

「日本ほどいい処はないという結論が出るのではないかね」

そう言いながら、石山は椅子を傾けて目を閉じた。疲れているのだ。次郎も疲れているが、頭がさえて眠るところではなかった。石山と同様に、間もなくヨーロッパだと、疲れた心がはずんでいるのだ。ヨーロッパに着く前に、あのことは石山に打明けておかなければならないと、急に思い出したが、彼は快く軽い軀ミヅマタをたてている――

あのことは、渡航許可証がおりたからとて、ペンクラブの書記長に伴われて、それをもらいにGHQへ出向いての帰り、銀座裏の珈琲コヒーをのませる店に皆で寄つた。季節外れの雪のつもつた午後であつた。銀座裏にも喫茶店は少なく、何処もアメリカ兵で騒々しいので、次郎たちは滅多に喫茶店にはいないが、その時は、アメリカ兵が来なくて珈琲のうまい店を知っているからとて、書記長が案内したのだつた。若い女が二人で経営している小さな店で、昼間から暗かつた。アメリカ兵の代りに、十人ばかりのフランス兵が活氣だつていた。アメリカ兵ではなくて、朝鮮戦争の休暇に東京へ来たフランス兵だと考えられたから、次郎たちは不快な顔もしなかつた。珈琲もたしかにすばらしい味であつた。珈琲は闇でも日本人の手にはいらなかつたから、次郎は香りを全身で吸いこんだ。同時にフランス兵の話に自然に耳をたてた。フランス語は忘れた昔の歌を聞くように、なつかしくて胸がおどりと、そばの兵隊に話しかけないではいられなかつた。見れば二十歳そこそこの、あどけない目をした少年だ。

「私はこの六月頃二十年ぶりにお国へ行きます。さつきGHQの許可がおりたところです」

若い兵隊はフランス語で話しかけられて仰天したのか、真面目な顔になって、じっと次郎を見てから、答えた。

「ぼくの国へ行く……ああドウス・フランス（優しいフランス）をはなれて、朝鮮で人殺しをするなんて……ぼくも帰りたいです、パリの家には、母と妹が待っていますから」

「パリですか、私もパリへ行くのですが、戦争するためにパリから極東へ来ているなんて——」

「そうでしょう？ それも、何のためか、誰のために戦うか、わからないですものね、人殺しごっこのような戦いでもものね……あの、手紙を書くから、パリへ持って行って入れてくれませんか」

「手紙なら、東京で投函した方が早く着きますよ。私がパリへ行くのは六月ですから……」

「兵隊の手紙ではないです。直接パリへ行く手紙でなければ、安心して私の心を手紙に書けないのです。解りますか。兵隊のは検閲があります」

そう言うなり、そのフランス兵は他のフランス兵と私語して、二人とも手提袋のようなものから紙を出して書きはじめた。他の兵も彼等に私語するなり、同様に書きはじめた。

次郎たちは石山の出版社から自動車が来るのを待っていたのだった。東京に自動車^{クルマ}が少なく、電車かバスの便のない場合には誰も歩いたが、その日は積雪のために、出版社に一台しかない自動車^{クルマ}を、あいている時に利用させてもらったのだが、次郎はその自動車が来る前にフランス兵が手紙を書きおわるように、必死に祈る気持であった。運よく自動車が迎えに来た時、三人のフランス兵から五通の手紙をたのまれた。次郎はそれを背広の内ポケットにおさめながら急いで自動車に乗った。

しばらく行くと石山が、あの手紙はどうしたの、ときいた。次郎はフランス語を聞いたよろこ

びでうつかり、フランス兵の手紙をバリで投函する役を引受けることになった顛末を話した。石山は驚いて、不謹慎なことだと咎めた。万一GHQに知られたらば、渡航許可を必ず取消されるから、手紙を返すように忠告した。そして、自動車が石山を出版社へ送りとどけてから、次郎を東京駅に送る前に、わざわざ珈琲店に引きかえさせた。しかし珈琲店はがらんとして、元氣なフランスの兵隊は一人もいなかった。

数日後外務省へパスポートをもらいに行つて、石山に会つたが、会うなり言われた。

「フランス兵はいなかったそうですね。手紙はどうしました。すてた方がいいですよ」

「すてるより、東京から出してやろうかと……」

「いかん、いかん……兵隊のは検閲があるし、森さんが投函したことがわかれば、それこそ大変だ——」

「そんなことまでわかる筈はないでしょう」

「GHQの検閲をあまく考へてはいかんですよ。この前注意したとおり、渡航許可の取消しはもちろん、どんな難題を持ちかけられるか……何しろ占領下だからね」

次郎もGHQの怖ろしさは知つていた。それ故、すてる約束をして家にもどつたのだが、さて五通の手紙を出してみると、破いて紙屑籠に投げこむ気にはとうていならなかった。フランスの三人の若者のあどけない顔が見えた。その顔は、数年前に学徒出陣の直前に書齋を訪ねて来た多くの日本の学生の顔に重なりあつた。あの学生諸君は学業や親しい者に想いを残して、国家のものとめに応じて戦地へ赴いたが、戦地からはやはり自由に通信ができなかった。このフランスの若者たちも、あの時の日本の学生兵と同じ運命にあるのだらうに、直接にフランスで投函できるとして、想いをこめて急ぎ綴つた手紙をむざむざ破りすてるというようなことは、とうていできな